

土屋正義編輯

孫中山實記

九

遠世社
2269
9



待
14
2269
9

繪本石山軍記初篇卷之九

目錄

木下が諫不依て信長岐阜又歸城を

并淺井越前不急使と送る

六角兼禎殘黨を催して信長と支ゆ

并名將の高運危難と避く

秀吉仁政長濱と治む

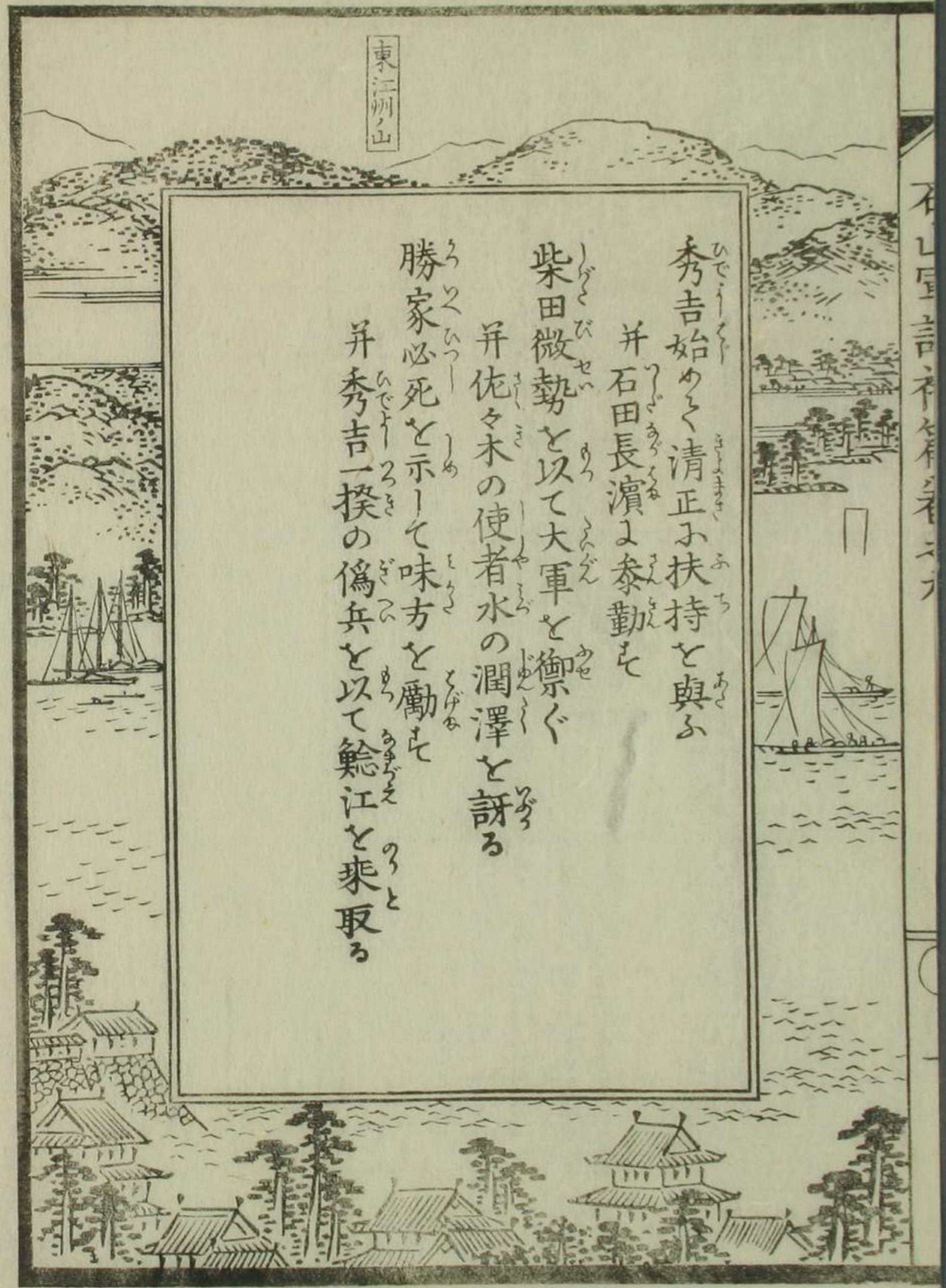
并加藤清正幼稚をて郎等と拘ゆ

長濱城

石山軍記初篇卷之九

目一

東江州山

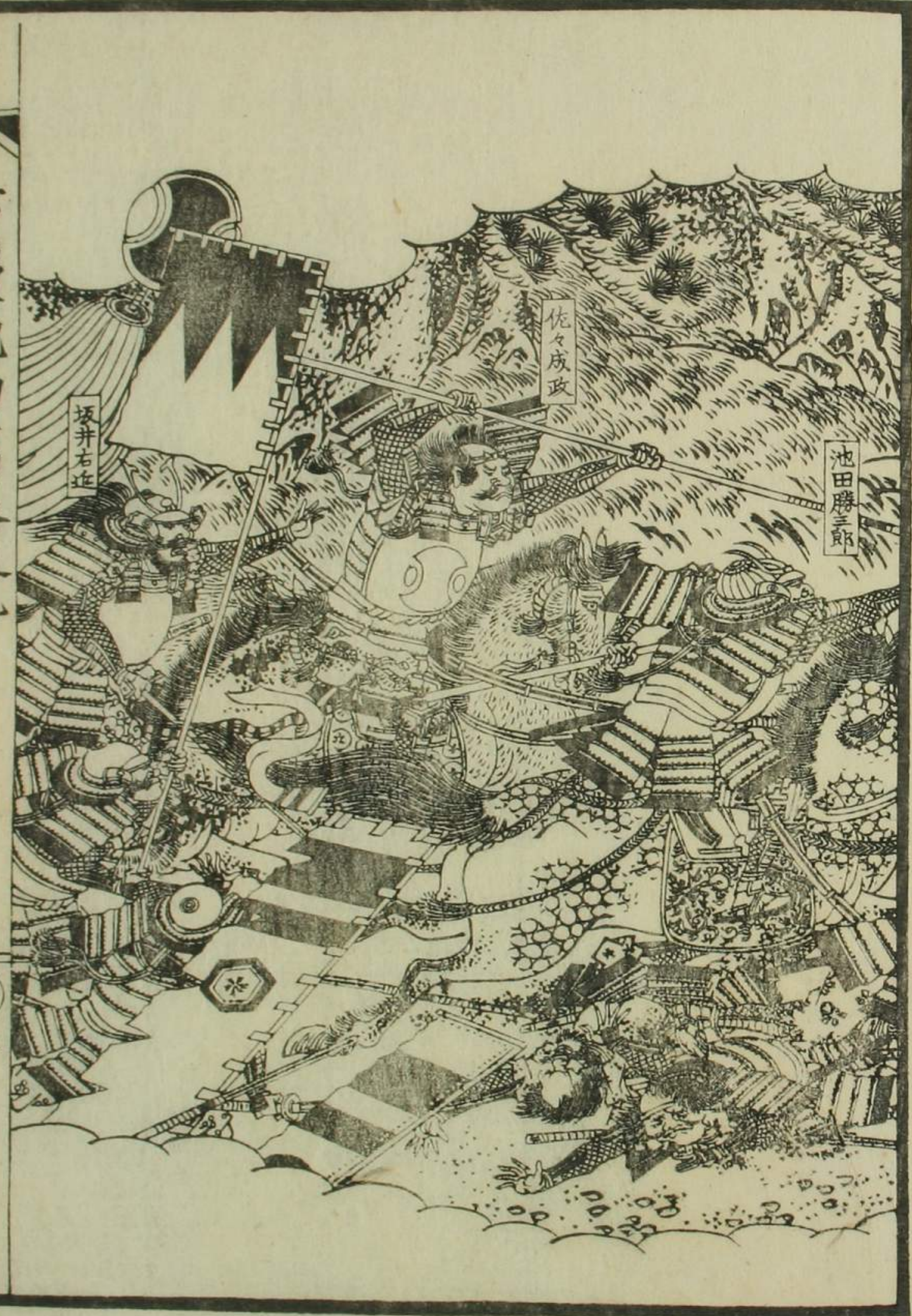


秀吉始りて清正お扶持と與ふ
 并石田長濱も参勤を
 柴田微勢と以て大軍と禦ぐ
 并佐々木の使者水の潤澤と訝る
 勝家必死と示して味方を勵む
 并秀吉一揆の偽兵と以て鯨江と乘取る

繪本石山軍記初篇卷之九

土屋正義 編輯

木下が諫小依て信長岐阜小歸城を并浅井越前急使を送る
 織田上総久信長朝臣へ京洛小滞留ありて朝倉退治の評定あり
 々々小木下藤吉郎申々るに今度手筒が峰金が寄の両城を責落
 浅井が謀り一揆と蹴ちし無異小歸洛ありませ一夏朝倉小一的
 あり上浅井小無益骨と折せし味方十分の勝利と申へ然る
 再び朝倉退治のため御進發あり跡ゆく浅井父子江南の佐々木と
 談らひ江州小峰起せば通路自由ありて味方困窮仕るべき尤江
 州の郷民どもへ佐々木家の恩顧の者あるは六角承禎ホが語らん一



織田家の
 勇士佐々木
 の勢と追
 散と圖



議も及ぶに皆渠小随ひ申べし余有と死の由々敷御大事あるべく候又朝倉と差かき浅井小向をありて拙さるる朝倉後援の事なく且浅井一味の門徒ホ蜂起仕り先日の耻と雪んと企ひせん斯ホの敵と制せんあゝ緩くと計りて其地と縮め其羽翼と削ぐ敵の心カと費さしめ介して後一時小討滅しめんとす夏肝要と存じ奉り候原來浅井の智勇備えんども勢少く朝倉の勢多るれども愚弱ありて謀小足らざるまゝに両家志と一致あるの期あるべし浅井の氣と焦燥とも誰も荷擔の人なきは勞まざる自ら弱るべし其憂小應じて謀る道種あり先此度の其終小差かきせらるる御飯国の後時江州へ鷹狩の御心持よく此づ働かせめり浅井朝倉片時も安心の

暇あり苦惱小月日を送り自然と財用と失ひ申べし尤御用心の事若州の諸士の人質とて約束と固めさせめし且諸城小味方の兵は籠あつせめし一揆蜂起の憂あり候べし今無益小御逗留りて御飯国延引ふ及び候り浅井朝倉牒ト合せ御帰国の路次と塞んと謀り又々御他行の虚と窺ひ濃州へ切入んと謀り候らん乎何りまき今般の一日も早く御發駕然るべしと勧め奉るべし諸將も此儀小同しとて信長も所理小思召ま然るべし若狭の人質と請取べしとて丹羽五郎左衛門尉長秀明智十兵衛光秀と若州へ遣り兩人彼國小至り佐垣の粟屋越中守熊川の松宮玄蕃元高松の逸見駿河守名郷の熊谷大膳その外武藤上野寺井源左衛門小悉

人質と出いしらるふり。丹羽明智らと召よ具い一い飯京い一い信長い大
 不悦いひいふい余い有い江州いの押いの爲い小いと先宇佐山いの城い小森
 三九衛門尉い可成い永原いの城い小佐久間い右衛門尉い信盛い長光寺い
 の城い小柴田い權六い勝家い安土山いの城い小中川い九馬い照同い八郎い九衛
 門尉いと籠いかいる。扱い長濱い先年い將軍いより木下藤吉い郎い拜領いす所
 あり。此度い入部いして城いと守り領分いの百姓いと撫育いす。浅井いと押い
 京都いより岐阜いへの通路いと自由いあり。仰いらいしい秀吉
 その大恩いと感謝いす。速い小坂田い郡い長濱いへ罷向い警衛い嚴重い小申渡
 是と守り柴田い佐久間い森中川いおのく持場いへ趣いす。諸い亦い浅井い父
 子の朝倉い小味い方いとあり。信長の退口いと排いんで討取いんと企いす。

其事いあいどい信長いと異儀いあり。京都いへ引返いす。残念いなる思い共
 爲方いなく。再び謀略いと廻いらいる。不定いめく信長い早く飯国いあり。路
 次と支いへく討いべし。數用い意いとあり。二日三日と過いまいる。更いり
 其沙汰いあり。長政い思慮いと廻いらいる。信長い京都い小逗い留いを
 幸いひい朝倉いと申合いせ不意い小濃州いへ押寄い岐阜いの城いと攻落いす。其
 勢い小乘いして上洛いあり。信長い一いも争いうい怖いるい。夏いあり。冬い
 尺一い拳い小討取いべし。時節いぞと諸士いと集いめく評定いあり。何いまい
 充いの夏いあり。一決いす。直いらいる。越前いへ飛脚いと馳いせ。如此いの由い
 告急いく出馬いし。と勧めいる。義景い此程い木下い追落いされ。匍い々
 敗北いあり。怖氣いなり。醒いまいる。出馬いと好いまいる。楚忽いの謀畧いあり。

どとく同心せざるは長政の大小あせり再應申遣せしむも義
 景承引あま程小長政も為方多く拳と握つ齒とかくて止るを
 残念なり。信長も木下が諫め依て京都若州江州等の仕置
 夫々小沙汰し終りく。五月十九日京都と發足しあひく
 六角承禎殘黨と催して信長と支ゆ并名將の高運危難と避く
 茲小亦江州の先主佐々木六角義賢入道承禎の先年觀音寺山
 と退城し。石部の城小隱き住も遺恨の月日と過して如何と
 江南と取返さるると謀まども信長の威勢日と追て廣大あるが故
 小勿々敵對思ひも寄せ。時節と見合せ有るが。今度浅井愛心
 して江州小於て信長と討んと謀りしと聞時至まると雀踊し先

亡の餘類と催促なり。今迄織田の威小怖く。此彼小蟄居と
 浪人ども忽ち小蜂起し。愛智郡鯉江の城小揃籠り市原辺の
 卿民と駈り。信長の飯路と遮り討んとこそ謀りたる又承禎
 小一味せし善住房とて心剛ある鳥銃の名人あり是は勢州朝明郡
 杉谷ある圓通寺の住僧あり承禎と俱小江州野洲の河原出張
 信長の歸路と今やくと待りたる。信長の江州路小入ても更
 小急がせ給ふ。緩くと諸方の手當の沙汰あり。静小馬と打
 せしむるが。野洲の河原小敵ありと注進し。信長微笑ひ
 定めく卿民どもの一揆あり。何程の事らあらん蹴りしと通る
 くと下知あり。坂井右近池田勝三郎前田又左衛門佐々内藏

助等直先小進んで士卒と勵ま。佐々木勢の備へ中へ面もあ
 ぞ切て入。堅横十文字小駈立々々。敵大勢あまども争う織田
 家の勇士小及ぶ。四方へぐつと散乱と。佐々木承禎大に怒り。手
 勢といふめく切てくる。信長の旗本勢づきも一騎當千の勇士
 あまべ。敗北の臆病つぎ。江州勢。忽ち小切まくら。郷民どもと
 諸とも小我先くと敗走。くる小。兼禎入道心ざら。猛とつ
 とも總崩ま。と爲方なく。鯨江の城小逃入る。織田殿を強て合
 戦と好とあつと。逃行敵と追捨あて。路と用とく。徐々と押
 くる。威風ま。と小傍と拂ひ。勇々。し。り。り。り。り。形勢小善住房が規
 眼定ま。と。且敗兵小駈隔りと。間遙小延々。れ。善住房遠く望

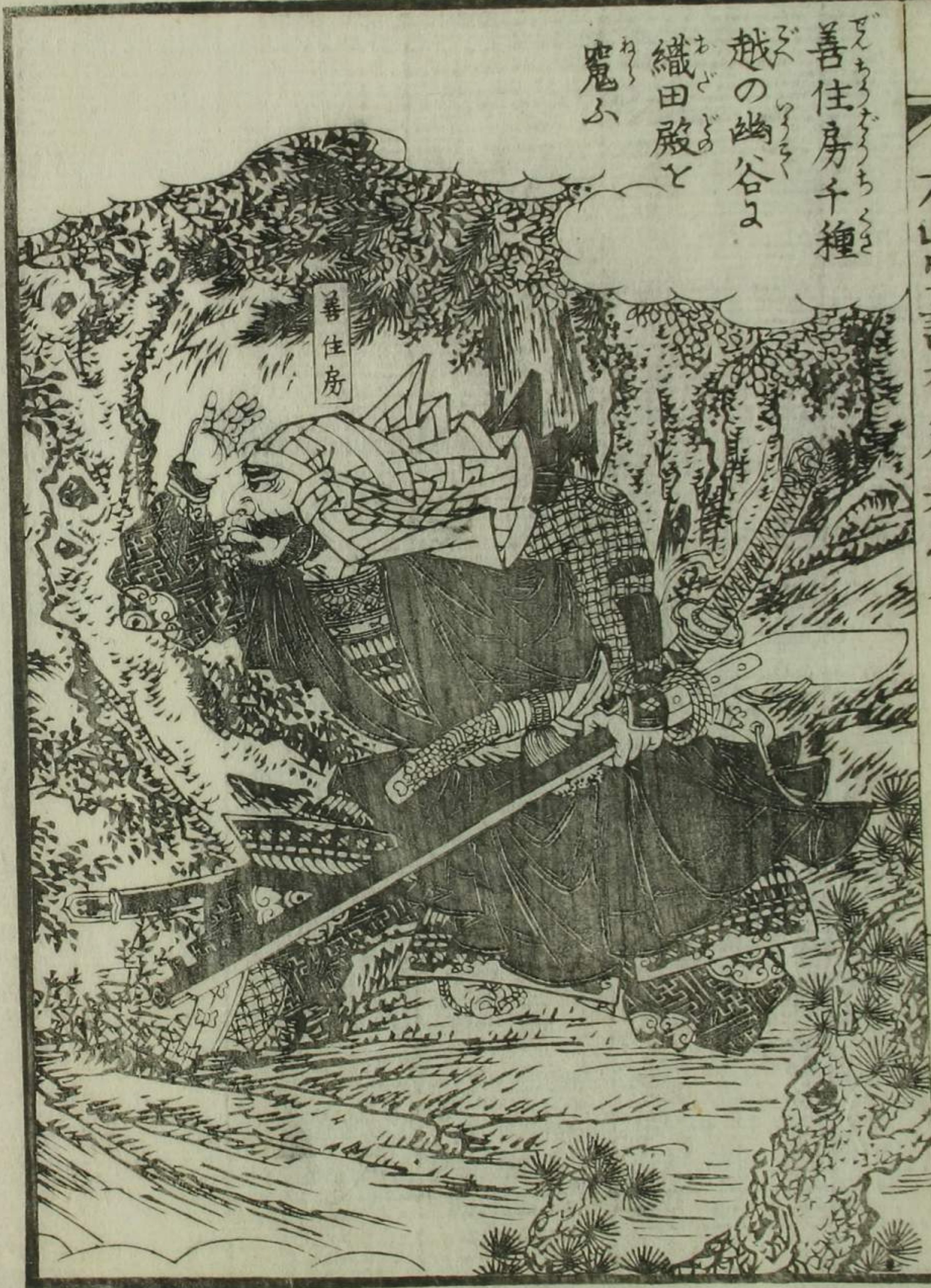
見ら小。信長莞示と打笑て諸士の勇戦と称美し。浅井佐々木が一
 致小あ。と。速り止んと謀る。も。吾旗本の勇士等小何ぞ及ぶと
 と。事もある。小見申。と。せ。め。小眼。と。九人あ。と。見へ。と。然る
 坂井池田の人。一同小申。と。此等へ原來郷民等の一揆なり。
 恐る。と。非。と。と。と。佐々木へ累代當国小住して能百姓等
 と。馴押。と。此度の企。と。一朝一夕の事。と。候。と。此先野
 小亦打出て。妨と爲。と。と。存ら。候。然。と。何。と。災禍の候
 とも量り。と。御用心深。と。小如。と。有。と。と。蒲生賢秀と案
 内者。と。困道。と。還御。然。と。と。申。と。と。信長実々然
 と。と。宣。と。夫。と。日野の城へ入。と。と。賢秀父子出迎へ

心と盡く饗應しつ。頰て千種越の山路と案内し奉り
 此千種越とつひ日野より音羽田津畑山と越て伊勢国三重
 郡千種の里小出る峠なり。路峻く谷深し。臆氣よく人
 通るぬ所あるべし。蒲生より伊勢国への兩道とて常より秘せし
 道あるども今日の爲るに究竟の所とて導引し奉るる。
 介有バ誰うは是と知る事

圓通寺善住房の野洲の河原とて織田殿と打損ト。安くぬ事に
 思ども爲方もなく種々と肺肝と碎さし。只我一人暗小隠し従ひ
 ゆきし。思ひよりる所とて打取し。姿と替て織田勢の後小立
 前小隠し窺ひるる。蒲生が案内より千種越小かりぬと図

出。是を願ふ所の幸あり。吾住む杉谷より峰つとて溪通ひ
 年來あるる所とて切所と前小あて木蔭より規視あり。へく
 誤つ事あんと喜び勇て鐵炮携え千種嶺の本隠し深く恐
 びく待居り。程なく織田の先鋒の武士追々小列り九折の山徑
 と一勢く押りくる。善住房の強薬とて二玉織田殿の真直中と
 目當とて火蓋と切過ぐ。表衣の袖とく身小的ら善
 住房いよせと立再回玉と込めて打りども規視とつとて飛
 散り。織田勢の大驚とてその曲者捕んと騷と立ち信長を
 是ととめ命を天小あて捨置り。とて屑ともせむ。徐々と馬と進
 て。頰て峠と越ぬ。千種の里に入ぬ。善住房の此体と見え舌と

善住房千種
越の幽谷よ
織田殿と
鬼ふ



善住房

善住房ハ
勢州朝明
郡杉谷村四
通寺の住僧
あり杉谷村ハ
江州愛智郡
切畑村ハの通
路なりと云



石山軍記新編卷之九

卷つ懈間と忍びく暗小逃脱る。介後信長より何事も多く愛
度歸国し給ひぬ

秀吉仁政長濱と治む並加藤清正幼稚にして良等と抱ゆ

木下藤吉郎秀吉八年末の戦功あり需めざりて立身富貴の時小

あひ江州坂田郡長濱の城主となり判之將軍家より新恩加増の

領知とあり事。武士の誉言まで只管小悦び長濱小入部して領分の

百姓町人と歸伏ありむ仁義と先として法令を正しあり查

省と儉と示せしむ。民自り是と慕ひ四方擾乱の中あり兵

長濱の静謐あり。民其爲業小精と出りたるふより追々に

豊饒の地となりふより。秀吉猶も領分安全の計策と廻ら。敵国

の間者と探り無頼と禁しめんが爲壯士と分ちて村々里々と晝夜小

限らど廻らむ。怪し曲者と召捕せり程小長濱の領分益々

穩やふより。下民枕と恭くし。領主の政道と有る悦びる。但

其見廻りの壯士より加藤虎之助

其姓ハ藤原ト由緒正ト之トモ久ク氏同ト下リ秀吉の故郷ト同所

尾州中村ト住一鍛冶ト業トシテ渡世トセリ五郎助の子ナリ

加藤が父五郎助の叔母なり秀吉の母トモ又同ト縁トモ也ト云尾州中村の

十五歳清和源氏信濃國の住人なり父の基美濃國小まり

然る小齋藤道三の爲小襲と頼藝美濃國と出奔し後行桐も浪人ト助作ト

居たりと秀吉洲腹ト住し時召し入ると扶助せし此三人と首領小申付れ

らり。もて此三人ハ竹中半兵衛小預けし軍法と學びせり。重

治教導あり。何れも心中心猛くして器量も尋常小超り

く。先頃越前の軍も試みのため連行し。三人とも相應小働さ
思の俣小手柄ありつるふ。未頼りく思ひ木下とすめて前髪
と取り也。加藤虎之助清正福島市松正則片桐助作且元と名乗せ
る。此者ども幼稚あまも勢高く力量勝まると以て長濱の領
分と心の俣小巡見せしめ。民の煩いと問ふの目附の役人といふ
一時加藤虎之助長濱の城下と離れ領内と子細小巡見しつるふ
浪人と思しと壯年の武士二個その趣意知りも口論と仕出し。
頻て喧嘩とあつて鬪争不及るあり。其一人の色白く髭青く身丈
六尺許の大男あり。何れも金剛力士とも言つべき相形あり。一人の色黒
く眼尖ど。身丈五尺許小兵あまも尋常ありぬ人品あり。尤互小

零落て困窮の体なりと。之ども彼大男一盃の村醪小鬱と散。二
盃まじく天地と狹しと思ひ三盃さし小世と世とも知らず。熟酔の
余り小我と忘まき。路次の並樹の蔭に寄る草の上小打倒。前
後も覺へて卧り。又件の小男も十分の酔心地まじく或は笑ひ
或は罵り。一步い高く一步い低く。漂ひ来り。如何に過ち
彼酔卧り男の上小俯卧小倒まき。大に怒つて何奴あれ
往來小晝寐して道行よと引倒せし。堪忍ありと罵れ。彼
彼大男眠りと覺し。是は理不盡なり。我心く睡まら小土足と踏
うけ面白く夢と破りあ。却て我と罵るを奇怪あま。重ゆ
汝が身の爲小其両足とへ折て遣べと大手と尋げく飛く

此の件の小男少しも悪びまじ侍と打倒し乍ら誤り合せて刺
 種々の過言無禮なり。道にまじと切つまは大男も怖へばを抜合
 せし鋒より火華と散して戦ひより双方手練の壮者ありて勝
 負の色見へるん折しも虎之助行くる二個と制して其起原を糾
 らふ大男は今年十九歳一人の母ありて老病小惱めるとみ抱し。尚
 日頃より好物の魚とよへんと貧苦の中より是を求め飯る便立り
 此程の鬱と聊り散せんと茶店ふ入て酒とのと好める故と思ふと
 過し。道の傍辺ふ卧ころ彼男の思ひもよるん無体の詞ふ止と得
 と闘諍よ及び候ふ全く酒狂の争ひも宿意ある夏あふど此方ふ
 遺恨らりの相手も恨をあらぐ様なりと詳ふ言ふぞ小男は大に

耻入今年十九歳ふ成れが未熟なるまじも習ひ得し藝を以て身を
 立んと思ひとち。諸国と経歴し奉公あさんと心なかりの進れ
 ども零落る身と飾る方便あられバ切取なはれ勇士のあふひ
 と彼人の帯したる兩刀の尋常なるは美事あふふ棄ひとん
 と悪心生ト僅の酒と飲あぐ。熟酔せし体ふりてなり。喧嘩を
 仕つけ殺さんと戦ふ事三十余合。其是まじ諸国と巡り許多
 の壮士と逢手とあし。戦ひと挑はまじも此男などの習練の
 者ふ未だ出會しと更ふなり。是全く我手練の鈍きふあはれ彼の
 男の孝心天に通し神明の助を給ふ処孝行の為ふ心と竭はし我
 悪心と黒白の相違ありと慚と思へば面目あり然まは早く過

ちと改め悪と告申なりと心底は、まづ速くまは加藤虎之助ハ
 幼弱ありと、いども思慮ふくむ者ありて、二個が誠心を幾ど感ド
 懐中より一包の金を出し、是と平等ふ二分包ち先一包と彼大男ふ
 阿と足下老母ふ孝心なると、近比感ド入る故、聊あぐら分ちある所
 なりと、又一と相手の男ふ渡し、是と以て衣服と繕ひ奉公仕官と成
 しか、決して悪心と起さざらん、と教導し、尤此金の私の計ひ非は
 領分と巡見し、不時の災難ふ困窮せしむる輩亦善行とあり、乍
 ら零落せし者あり、ば是と与へ急と凌げせ、猶その者の志ふ應ド
 執成はべしと、地頭と人のの細く定め置きし、金子あり、快く受
 納あり、然るべしと、慇懃言渡せ、虎之助が厚き詞ふ感ド、落涙ふ

ひせびつ。霎時に物も言ざらざる。猶あつと大男のいへ。我々既り
 酒狂のあやう。御領内を騒がし候事、誤り入て候ふ。さき所の御法
 と以て罪科小處せし事。天下の御大法あるべし。其罪と宥め
 らる。而已ある。多分の金子と下さる。夏御禮と申さん詞と
 らど、辞し奉り、い猶々失禮の罪と重糸。且若き御方の御芳志
 ふ戻り申べし。我々斯のごとく、落魄見ら、陰もなかり、共侍の名と撤
 と身ふらへ、千万金も受まじき筋ある。受申べく、謂まを、共
 此御金の国主仁惠の賜ものといひ、且、年若き、和君の御詞ふ従ひて、
 母が病と艱ひ申べし去あぐら。国主の惠と受て、国民相當の恩と
 報いざん、禽獸と等しと。今此恩と報んと、まは、高年多

病の老母あり。然いあまど母と首尾よく見送りく後必ぞ泰上仕り候ふ。其時の犬馬の代り召仕る給ふべし。涙と共拵らぐ。相手の男も是はひく。加藤がよ。金子と戴き計らぶ。大恩と蒙り。御禮申さん詞もな。報恩の事誰ととも同じ心く候ふ。但我等の母もあ。妻子もあ。何国とて心に儲。家もあ。衣服と整へ。誰人の許へ推泰申へ。便もは願。是は直ふ。和君の許召置ま候へ。命と今より任せ奉る。尤既討て死と命と。和君不助けら。我命あ。何と惜申へ。斯の如く零落て候へ。原の中国の者父の周防の大内仕候が。義隆郷の倭びあり。時他国ふ有て死あれ。

甲斐の命存。を毛利元就聞て。種々に詞を設る。招き。身を山林に隠して。義を守。残ん。年を全くして。忠臣の掟。違。身没候。其時僕幼稚。知因の者等介抱。形乃如く成長。今年廿一歳。井上大九郎と申。叔父井上五郎兵衛と申者あり。毛利の一族。小早川の家。仕官して。以て。某と度々。彼家。推舉せんと。申勸め。父乃志と思へ。毛利乃一族。仕ふる心。今迄。牢々仕り候。古。今。乃荒増を語。親類。も無身助。大。歡ひ。吾も幼稚。父。後。親類。も無身。故。平日。寂。明暮。て。腹心。と。得ん。事。と思。定まる。所。領。た。れ。扶。持。各。二。人。を。雙。び。る。勇。士。あり。

虎之助浪士の
闘諍と制と
金と恵む圖

木村の姓は近江
源氏佐々木の一
族ゆて佐々木行
定の子定道近江
国木村の庄より
住ると以て木村
太郎大夫と号せ
是其始なり又藏



加藤虎之助

木村源三成綱の
後胤なりとて
清正不仕て朝鮮
征伐の時頗る高
名の譽をあり井
上大九郎は播州三
木郡大村の住人
井上藤左門
宗清入道の
子と次郎の
嫡男あり太
閤朝鮮征伐
の時加藤清
正に従ひ彼土に
勲功多し



井上大九郎

木村又藏

然づ。大家を尋ひて奉公あはぶ。相應り立身せらる。爾有と僅な
 り。小子の寸志と感し我を仕へんと申さる。條過分至極なり。さうと
 も斯う世乃風ひなるとい。我又一城の主と成ぬ。運なりとい。難
 し。二人志を合はし時ハ其利を金を断とも言。面々よく亦我を助け
 て涯分乃忠を竭されは。名誉遠く四方に聞へ。榮花正しく子孫に
 傳り。なんと。満悦乃氣色表。あはれ。自然と主將たる。威嚴
 備りて見へ。彼大男も項とた。落る涙と押へ。申さる
 ハ信義と思ふ者ハ賞祿乃多少。抱へ。無益乃死。ま
 り。斯まであつく持たさ。君乃仁義又有。井上と
 ま。早此君。仕へん約束有。羨ま。某も俱に残。止らん。

劣る。思ふ。老母の先途と見。是まの志も空
 ら。頷て。泰上。井上。の能き心と。若き君と補
 佐せ。僕が住所。當辺の山の奥。先祖と申も。嗚呼。ま
 ども。宇多源氏の庶流。佐々木の一族。木村又藏と申者。候ふ。一
 門。ある。佐々木六角京極。より。ふ。疎遠。候ふ。今。斯
 る。流浪の身。心。古昔の名残。とて。大名も劣る。
 存。吾君年。猶。稚。ま。智略の長。あ。勿
 長者も。及ぶ。ま。か。君と守立。奉。未代。小高名と傳へん
 事。の。本望。なり。我年。十九。歳。行。遠。候。程。立。飯
 り。忠勤を。勵。申。と。盟約。暇。と。告。て。立。去。り。ぬ。大九郎。其。ま。に

虎之助不從ひく長濱小至りくる。此時虎之助未だ知行あるは扶
持を如何せんと思案しける形勢あるは、大九郎の云く我君の
愁ひの事ありと大丈夫の心とて憑り米穀の多少と頼りて
ぞと諫めらる。清正いよく頼りて思ひくる

秀吉始めく清正小扶持と與ふ並石田長濱小泰勤を
梅檀の嫩葉よりく芳しく。加藤虎之助幼稚ありとも。龍駒鳳雛
の器ありく。自り主將の威と備へて。今般不圖奇代の勇士と抱
へ得く。數心小歡ふとも。此時つめて部屋住りて知行ある故大
九郎小扶持せんとして爲りて。秀吉の前小出て此度の一五二十と
詳く小語りて。秀吉大感心し。井上が志大丈夫と謂ふに連

大九郎と召連りて有て面會ある。小眼光をどく骨法逞しく。凡者
あつど見へるは。虎之助より過分の良等といふも。清正も亦
徒らわたり。肝太く心飽まど剛あるは成長の後い必も國郡の事を
あつ。大九郎能く補佐して勇氣と養ひ候ふ。虎之助も又大
九郎と腹心して萬事と相談する。主従一致して勲功と立ちやとて
清正へ五百石の扶持米と出され。初めく見泰の悦びさせよとて
大九郎より衣服金銀と取せり。井上感涙と催し。長松の下小
清風ありと因り小違ふ。此大將の下ありて。斯る良將の實生
も有るは。驚き入て退出せり。秀吉井上と見知りて天晴の侍
る。木村と中も嘸く勝ま。者あり。是も我手小得り幸福

あつと悦びつ。猶草深き山里小世と道まゝる武士の時と待ある者
 も有るん尋ひて是と抱へんと長濱小在城の間鷹狩川狩して自
 巡見し神社佛閣と礼拜し。武運祈禱の爲と號け或は料足と寄
 附し或は田地と割あて専ら懇誠と盡さるるが一日観音寺と
 する山寺小叅詣しぬ本尊と拜し介後方丈ふりて暫時休
 息せんと玄関ふ入らると一僧住僧奔走して數りてははるるを秀吉
 固く制し止めく。但冬暑小のぞとて喉乾る湯一口給りと有し
 時然るる雜僧も無りし手習ひの爲小日々寺小來る容色悪
 氣ある少年とて湯と獻げしひる小秀吉もかる山寺小似氣あは
 心地して良久ち守り見ぬが推して今一杯と所望ありとる。

此少年又同ト揉小湯と斟て進らる此度の湯の少一熱うり小うり。
 秀吉これ九者ありし心中小沈吟し住僧小對ひ此少年の如何ある
 者ぞと尋ひぬめは此近隣の者の子ありいと答ふ秀吉頷て傍小呼
 りせ此湯の汝自ら汲來るやと問はるるふいふも自ら斟ていと答ふ
 秀吉又重ゆと云初小ゆ一暖とる許の湯ありし二度めの湯の
 些熱く空程あり此加減の少又の心より爲しとやと問ありし人答
 て左候ふ御喉の乾うせぬ由あり湯と求めぬより熱き言ふ
 召せぬ小悪く多く推して態と暖とる湯と奉り候ふと然る
 小又一盞と仰らるる故最早この度の初かどる乾うせぬまると
 存し候ふく少一熱く仕つて候ふと聲も詞も清しげ小言上り

秀吉情と因めい。行儀とよ顔容とよ尋常の者とも
 見へど。其うへ心中の智計たのりと稱美ありと。介後住僧對
 い此少人我を得と給へと仰せらる。住持兼りて何れ親多
 者小御所望の由申因せ候ふ。いと直小渠が父と呼ぶ如此と
 と言因し御前小出し。これ秀吉近く招きよせ其方の素姓は
 ある者ぞと問あふ。僕い此石田村小世と累もく。住居仕り候ふ百
 姓。佐五右衛門と申者あり。先祖の武士と申傳へ候へども。年久く草
 刈山樵の群小入と。昔の名残更小分明あり。併なう。忤一個の
 如何も。武家小仕宦致さ。祈居候ふ處思ひ。御
 目小留りの事。本望のり。辱さ旨と申さ。秀吉大悦び

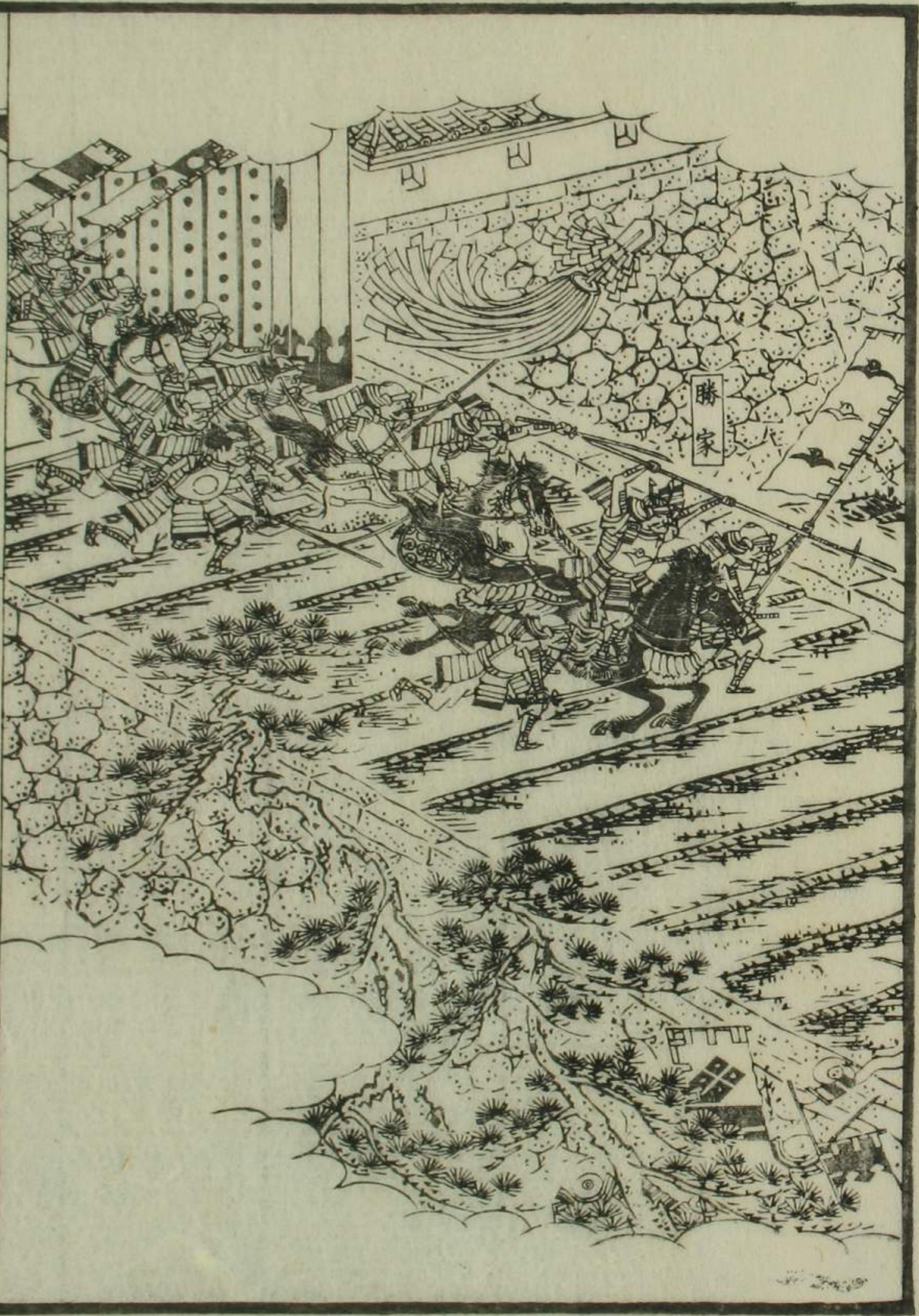
其名と尋ねめい。佐吉と申年十二と答へ申ふ。然らば汝が在所
 の名と以て石田佐吉と名乗る。主従の約とあり。直小伴
 いめい長濱へ飯り。平生小傍と離る。寵愛あり。是後終る
 榮華と極め天下五奉行の隨一治部少輔三成とて。江州佐和山の
 城主とあり。九三万五千三百石と領せり。諸亦江州小ある所の織田
 家の持城小籠る。徒或い浅井と戦ひ。或い蜂起の一揆小向ふと。共
 長濱よりい秀吉く持り。日頃の仕置行届り。小谷とい
 堀と接へて二三里の際あり。浅井の謀反と少も恐ま。浅井が
 一揆時。長濱領へ來り。事あり。更小乱妨狼藉と為り
 柴田微勢と以て大軍と禦ぐ。並佐々木の使者水の潤澤と誂る

于茲柴田權六勝家の江州蒲生郡武佐なる長光寺の城八百餘
騎を守り居りたるが佐々木六角兼禎を攻落さんと先敗
北の残黨を集め其余郷民等と語らひ五千餘人の勢あて同五月
廿一日の早天よ長光寺の城を押しをり抑當城の平城を要害
の頼むと方もあて先是と一撃を攻落し其勢ふ乘じて所々
の城をもと落去あてめんが爲あてど城將柴田勝家の名ふ岡え
る勇將あて少の屈せん足輕と進め透間を鐵炮を放ちらと
射とせと是と防と郎等あてる柴田源九衛門同新九衛門并郷
五左衛門井上久八中村與左衛門等と始めとて究竟の逞兵三百
餘騎城戸の内小窺ひ居を寄手の色合と見とらと切て出んと待

掛り。佐々木の勢の雲霞の如く。雖も思慮淺くして無法小押詰
縮麻竹葦の乱れ。形勢よく透間する所あてられ城の中を放つ
矢王大木大石小手足と損。左右あて進とらと見濟。その能
時分ぞ討拂へと大音聲小呼とらと城戸を閉りて三百余騎鍵を
まを作つと群と敵中へ面も振と一回小突入中にも大將勝家好
ひ刃の十文字の大鎧もつと。瞬間小敵五六騎と突伏つ。無人とら
と行如く思ふが儘不駈まらと勇威と示し働き。恰も鬼神を
荒ら如くあて更小面と向と様を。寄手の頗る多勢あてても
元來郷民どもあて軍令進退法あてゆ柴田一人は駈崩され右
往左往と敗走と勝家軍小賢とれば乱と敵と追討せと静味方

の兵士と纏め城中小引返と是と合戦の始めとて四五日が程晝
夜と分らん追つ返ら戦ひしが柴田まゝとく猛しくも寄手の
多勢小總構と破らま本丸小入て籠城を介有も弱る色目なく
却て寄手の疲まると暑小中りく病も多う斯て織田家の後
援来らぬ弥軍難義あど如何せやと評議しるる一族より
三雲新九衛門思慮と廻ら浅井朝倉と語り合當国ふる織田の
城々と攻ま京都と美濃の通路と断り其内味方京都へ攻入る
忽ち本意と違とどく即時小谷へ使者と遣り右の謀畧
と以て語り長政父子も誰り同心とる人や有と思ひ煩ふ時え
即ち合体の返事とる越前へ使者を送り義景も一味はあ

と勧め遣り浅井の二揆と語り織田の持城所々と責させ其身の
江北の兵と起し先長濱と攻落さんと議しるる義禎は浅井の
一味と悦び再回長光寺の城と圍み無二無三小攻付りも必死を
極め城兵の殊更此一兩日休息し手負と療まれば弥勇氣と
増少も驚く氣と見せ雨霰と鳥銃と打出寄手の兵と漂
り烟の晴間より射手の達者の矢種と惜まぐ詰引詰射る程
小寄手小手負死人多くて乗入べしと思ひも徒らふ人カ
と而已費しる時小郷民の内より小賢と者進み出く申や當
城中より井水あると苦小候ふ唯寛めく城外より水と堰入の余
水の手るしゆこれ此水と切落しゆやと訴るるを實所理の言



佐々木美禎
長光寺の城と
攻る圖



條ありて即ち其者と案内者として忽ち寛と切落せり。頃ハ六
 月冬暑の時節。定めて城中水小渴して城兵ホ快く働さ得はと
 思ひの外城中些しも難義の色なく常小かくは防ぎたる是ハ
 勝家籠城のよめ此寛許すとい始終難義とて一と慮り井と二
 三箇處堀らせたるふらり。寛あてても介の困窮せざりたり然れども
 炎天より水多くあき時節あまの如何あんと危ぶむ者も有
 ると勝家いよめと此井水晝夜小十四五斛涌出べし城中の兵士
 八百餘人あまの一個分小二升小足らと隨分大切小用也。其中
 一の白雨も有べし穴賢必らと水の乏しき色と寄手小見まへくは
 と下知とあり。油断なく諸方の持口と見廻るる寄手の定めて落

城近きふ有べし。味方の力を費らと事ありと軍と止めと窺ひ居
 るが城中弱き色もあく見へし程小兼禎入道奇異小思ひ。平
 井神助とより者として城中へ遣り。勝家小對面。數日の籠城
 小弓箭の位ハ頭とまで候子無益小士卒の命と失ふとまへり。城と
 閑とて退去あづべし。聊も狼藉あまへりと申べしとて出立せ
 るる小勝家使者と迎へて對面。兼禎入道の口上と因て悦ぶか
 顔色よく先以て御芳志の程辱く候去あづ。斯籠城と仕る事
 勝家が一心のふ候とん郎従ホまへりも一致して此と墓所と思ひ
 決りし事あると能々壮士等も申因て是より返答申べし但當
 城より事あづ。味方の將士の籠るる城々多くはバ夫等の思ふ

所も候も何事も諮らひて後否應の儀不及と申す。平井も是と聴て如何なる尤も候も御返答の趣と兼禎(申べ)して座と立て柴田の扈從小水水と乞ふれば兼つく直ぐ大盤臺小清水とありくと汲入二人くかき出し神助小水水と遣りせ残り水と椽の上より惜氣もあく白洲へ流し捨り神助是と見て城中水乏しくぬ容子なり心得なく思ひあぐ大門の方へ出行つ見まへ士卒ども冬暑小絶うみとて門内の廣庭へ水と十分小打ちとるるぞ。神助も弥不審おもひ早く馳之と兼禎へ柴田が返答と告て城中小水甚ど澤山ありと語りければ儲て城兵の弱らぬも道理ありとて尚も評議小時と移ぬ此時の維元龜

元年六月三日午の刻分ちりと因ゆ

勝家必死と示して味方と勵し並秀吉一揆の偽兵と以て鯨江と乘取る。亦有程小六月三日佐々木の使節平井神助柴田の返答と因取て返ると待て即時小勝家沈吟と決し城中の兵士を集め日頃水と汲て貯ふる所の桶三石餘入まる器五桶許り有るを一所小居ある勝家の云く某苟くも當城の主として敵中取籠らる數回切て出敵兵と追退ぞ多武士の道も爲(と)程の爲とまども此程城中の掛樋と切落ると士卒水小困窮を僅の水と頼るとまども冬暑次第小烈く泉源涸まへ漏と乏し斯くの氣力頓て衰へん尤大軍と引受て斯くろ能軍やと某一個の力小非と全く士卒も侍も殿の御恩

と厚く思ひ弓箭の道と汚すと心ふあり故ぞ。されば此城を
 運と閉さる殿小言上奉り。恩賞の地と申あへん功勞と謝さへ
 と思ひつる。今水の手を破らば惣構と入乘とす。本九計りと
 成て援の味方も来らば。渴して死んり或は又城を閉ひて敵小
 降る。然まども織田殿の御内々。柴田と呼ま人も知は身
 と以て何面目小佐々木小降らん哉。方々の如何とも其心小任さる
 一。勝家一人の思ひ切ら。今宵敵の陣小切入あり。小働さ万一
 運あつて勝利と得ば再び要害と修理して籠城し。殿の出馬を
 待奉る。若其事うまれば。か一せん戦ひと一足も引だ討死を
 べ。我と同心の人々の此水と思ふ存分小飲る。此水斯のて貯

火矢と防ぎ又臨時の用意なり。今入用あり貯へ
 たりと大音聲小下知。これ我々とも同し事死する異
 らぬ道なり。忠義の爲小討死せば一門他門の面目も不義
 不忠の汚名と受て何国の端も忍ぶ。潔く御供つ。力小
 任せ働くべし。詞清く答へ。勝家大小悦び。率さる。小
 思ふ程飲る。と免らる。何きも水桶の傍小立り。
 柄杓と取て汲出。心の俣小飲て後此勢ひ。切て出あへらる。
 天魔鬼神ありとも。恐る。足らばと勇立。餘も。馬り
 飼ひ。あし心地。やと用意と調へ打立身。勝家
 荒示と打。水面々水と。十分小飲つる。最早水。か

と尋ふ。一同此上りの聊もわづらひと答へし。勝家十文字の
鐘と携へ今敵小打向ひ切死小死する身の此水桶も何れせん。連
忽ち鐘の鐻して。桶の箍と打碎さ即り馬小飛乗つ敵陣さ
て馳出せり。此時の既小日暮夜小入て亥の刻過る時分なり。さ
勝家箍と切放せり。韓信が背水の陣と布し小異あり。さ
亦織田家の持城小楯籠り。佐久間丹羽森中川の諸將さ
面々の居城と守り居り。浅井佐々木小同心して。江州所々
小一揆蜂起し。晝夜と分ち馳集り。此彼の若小楯つさめ。貝と吹
鐘となし。騒動し。何れも城と出て柴田と援くる事と
得ず。手小汗握り。而已居り。就中木下藤吉郎の兵士と

下知し。用心厳し。随分領内と油断あり。守る。其隙
に長光寺の柴田と援ふ。日來の不快の私事を柴田城と落
ま。我君の御大事なり。彼人某が加勢と悦ぶ。何れは是と奈
所小見あると。間者を入り。窺し。小僅の水の手と頼と。さ
て必定討死と決る。趣き。是と援ふ。有る。去る。我
と柴田の仇讐の如し。我長光寺と援ひ。勝家尚も遺恨と益
べ。寄手の自ら退散して。柴田一人の力して。運と閑さ。如く
計ふ。我領分の郷民等二百余人と一揆の如く出立せ。六月三日
の夜半の頃。兼續入道の隠し住む。神崎郡鯉江の城へ。遣り。此
者ども。頼て鯉江小至り。是は長光寺の柴田水の手と切落され。籠

勝家佐々木の陣小夜討の圖

柴田権六郎勝家の清和源氏の末流斯波武衛の一族ありて舊の越後の住士織田家繁栄小



及び一族の終り家臣の第一と武勇衆小超と鬼柴田と松号



城難儀小及ぶふり人質と出して降参を請とゞども疑々思召せり。先高瀬殿小守護とされ候へとの御説小候と呼りし。城の留守居高瀬刑部門上の櫓より是と見らふ実郷民どりの一揆あゝ佐々木の印と持たれば少も疑念あゝ大手の門を閉まゝ一揆等二百余人と城中へ引入柴田が人質を請取んと何の用意もあゝばりて出迎ふ所と一揆の中小伏くまゝか木下が兵士等太刀抜きて切廻る二百餘人の郷民小の関を作つて竹鎗突出し無二無三小働けの城中大小周章あゝめさ上と下へと鬨く處へ木下秀吉一千餘人と卒へて静々と押詰隊伍とぞん攻入へ城兵益々狼唳とぞぎ是の敵小欺ひれとぞ備へと立て防

やとて城の本主鯨江相模守打て出て下知あせども敵味方入乱は殊小夜中の事あゝ周章のまゝ果々働く者も無りし。秀吉下知して逃れと追せど心の儘小落しとるを鯨江高瀬が兵卒亦大半小落失て僅小百人許小あり。程小此勢とく大敵小取籠らと犬死せんも口惜し一先落て免も角も爲へとて城門の関をしを幸と我先と道と出へ今小城中小支ゆ者一人も何れが秀吉の思ひの儘小鯨江の城と乗取て勝鬨あげと祝ひぬ却説佐々木の陣あり今日晝平井神助とて長光寺の城小遣とる小柴田が返答の趣と實情と思ひ何様諸所小籠る處の織田方と牒ト合せと返辞せんと言つれば迎も今明日の事あり隙明まで況や

處々小一揆蜂起し路次の往來も容易なるまじきと思へ悔り
用心もせむ物具と脱つ。熟く睡りと催て處へ必死と決り柴田
勝家直先小進んで切て入まば是小續て五百餘人づきも一騎當
千の壯武者得物と提げ罔と作り四方八面小切廻まば何と敵何
まを味方と見分るゝ同士討する者許多なり柴田の勢は逞兵を
思ひ切る死狂ひ其切先突くして又向ふべくも非まば寄兵は五千餘
人あり多勢といへども其甲斐多く駈あやまれ四度氣なく散りり
敗走を兼禎入道大に怒り斯計りの敵小最りろく打破らる事
やと何の踏止まらる備へと立真中小引つて一個も残さば討取や
大喜小下知とれども因ぬありて逃らるる兼禎も大勢小引らる

きて思へども俱小引ひきりしが三雲吉田水原田中の一族亦大
將の左右小添て馬と立柴田の來るを待受らる勝家斯と見る
よりも彼小勢多く扣へる兼禎入道と覺へる敵ふとそれ名あり
あひ近江源氏の正嫡なり黄泉の土産小討取やと言も敢て真先
小進め兼禎入道ふらと棄鞭打て引退く洩るる追
これ三雲新左衛門が弟三郎左衛門只一騎引返して士卒を勵ま
勝家小渡りあひ鋒より火華と散して十餘合戦いするが柴田
へ聞ある大方あり殊更今日と限りぞと思ひ切て打太刀と三雲の
過ち受損し真向と切割き馬より動ど落らるると柴田が良等
走り寄起しも立ど首とる勝家猶も猛威を震ひ馳廻るふと

電光石火より早く此太刀風小怖るる。兼禎が旗本も終小乱ま
 て敗北を斯る如へ鯨江の城小籠る。士卒等喘々逃來る。夜
 半の頃此御陣りの御使とりつ小欺られ城門と開き候り小織
 田方の一族より大勢一同小乱入只今戦い最中と注進あり兼
 禎驚き鯨江の城と落されてい長光寺と攻取るも其詰り一
 先を打棄て鯨江へ引返り敵と退け其上より重く此小押寄り
 下知る折り引次と鯨江相摸守高瀬刑部散々討あられ
 逃來る小是つ如何と尋る小一揆とと思ひの外木下藤吉郎め
 小出り拔きりくも城と乘とと息もつと敢て語らうと兼
 禎もつと果老と詞もあろうる此間小勝家の思ひの儘小切勝て

首と取と三百餘級勝因あけく長光寺の本丸とて引返を眼前
 小見あつ追とつと義勢もなく旗とまた纏とあせ石部とに
 てとつくと逃行をく小鯨江高瀬も俱小石部小落し初め五
 千餘騎より今小僅小残兵の百四五十人小過より見苦し
 一事もなかり

繪本石山軍記初編九之卷終

